

第46回日本医学教育学会総会および大会

基調テーマ：Globalization and Identity of Future Japanese Medical Education
活物窮理 ～医学教育の本質を求めて

大会長：岡村 吉隆(和歌山県立医科大学理事・学長)
実行委員長：羽野 卓三(和歌山県立医科大学 医学部教授・教育研究開発センター長)
会場：和歌山県立医科大学 紀三井寺キャンパス
高度医療人育成センター・講堂・基礎教育棟・生涯研修センター
会期：2014年7月18日(金)・7月19日(土)
総会：2014年7月18日(金) 13:00～14:00

O-05-3 診療参加型臨床実習を支援する症例基盤型小グループディスカッションの導入の試み

Easy framework for clinical-reasoning tutorial (EFECT) during clinical clerkship: a pilot program

○清水 郁夫, 黒川 由美, 森 淳一郎, 多田 剛
(信州大学 医学部 医学教育センター)

SHIMIZU, IKUO(Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine)

【背景】卒業段階での臨床能力を向上させ、国際標準にも沿った医学教育システムを構築するため、臨床実習の期間を延長させるとともに、形態を見学型から診療参加型へと改めることが国家的課題となっている。臨床実習期間に実施される少人数制の座学でも、依然として一方的な講義による受動的形態が取られることが多く、学生の自己調整学習を阻害する懸念から参加型実習の主旨に合致した手法の導入が望まれる。【目的】本学で実施中の文科省GP「150通り」の選択肢からなる参加型臨床実習を支援するため、臨床実習中に行われている講義形式の受動的学習を、症例基盤型小グループディスカッション(Case-based Small Group Discussion:cSGD)へと移行させることにより、臨床のプロセスを能動的に会得する学習形態に変革させる。【方法】cSGDに不慣れた臨床系教員でも容易に導入できるように、日本内科学会所定の病歴要約を元にした臨床推論型cSGD形式 "easy framework for clinical-reasoning tutorial (EFECT)" を考案し、平成25年度後期の本学第2内科の臨床実習でパイロット授業を実施した。【結果】各グループ45人を対象として、学生間の討議を元にして1症例の主訴から診断までを扱った。学生間の討議は活発であり、EFECTの進行上の弊害は特になかった。一方で事前説明がなかったため、当取組の到達目標の理解には若干の時間を要した。【考察】反転授業を取り入れることでさらに活性化される可能性が示唆された。平成26年度よりEFECTを本格的に導入するにあたり、教員のファシリテーションスキルを向上するため、マニュアルを作成・配布した上で、指導者講習会を実施する予定である。学会発表では、導入状況も含めて報告する。

O-38-2 漢字一文字を通して医師のプロフェッショナルリズムについて考える

A case of the effective education of professionalism for Japanese medical school students

○黒川 由美, 清水 郁夫, 森 淳一郎, 多田 剛
(信州大学 医学部 医学教育学講座)

KUROKAWA, YUMI(Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【目的】医学教育の早期に医師のプロフェッショナルリズムについて考える授業の必要性は広く認識されているが、未だその手法は確立されていない。我々は従来の2年次生の早期体験実習「外來患者体験実習」に、学生同士または教員と学生が議論し共通理解を深める形式を取り入れ、学生が選んだ漢字一文字を通して医師としてのプロフェッショナルリズムを考える授業を試みた。【方法】外來患者体験実習の当日、事前予告なしに実習の直前・直後、学生に「医師としてのプロフェッショナルリズム」という言葉から連想する漢字一文字を表記させた。同日の実習報告会でその漢字を各班の中で一人ずつ発表し、実習前後の思いを学生同士で語り合った。次に発表課題「日々の診療の中で医療関係者が果たすべき責任は何か？」を提示し、複数挙げられた漢字の中から各班のテーマとした一文字を選び、班ごとに意見をまとめ、全体発表会を行なった。【結果】漢字一文字を通して「医療現場の理想と現実」さらには「将来の理想の医師像」「患者さんの心理」に至るまで「日々の診療の中で医療関係者が果たすべき責任」について学生同士で予想以上の熱い論議がなされた。実習参加学生は113名、挙げられた漢字数は、実習前は41字、実習後は54字へと増加し、実習前は「心」「誠」など抽象的あるいは精神論的な、個人の心情を表す意味の漢字が多く挙げられたが、実習後は「察」「支」など具体的あるいは能動的な、他者の存在があって成り立つ意味を持つ漢字へと劇的に推移した。実習に参加した学生も実習前後で自身の考えが変化したことを認識した。【結論】学生は、外來患者さんの付き添いという立場から医療現場で垣間見た感動と驚き、さらには外來患者さんと心が通い合った喜びを様々な漢字一文字に表し、学生同士さらには教員と学生とが語り合い「医師としてのプロフェッショナルリズム」について共通理解を深めた。この手法は日本文化を基盤に医学生を能動的な姿勢に促すものとして有用であると考えられた。

O-06-5 参加型臨床実習における「アクセスログ参照機能」を利用した自主的アクセス管理

The future of the medical informatics system for medical school students

○黒川 由美¹, 濱野 英明², 清水 郁夫¹, 森 淳一郎¹, 多田 剛¹

(¹信州大学 医学部 医学教育学講座, ²信州大学 医学部 付属病院 医療情報部)

KUROKAWA, YUMI(Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【緒言】近年、医学生の診療参加型臨床実習が推進され、臨床実習の取り組みは多様化している。一方、主たる診療情報の紙媒体から電子媒体への移行により、学生教育は患者プライバシー保護を重視した電子カルテのアクセス管理という新たな課題に直面している。【目的】本研究の目的は、学生教育において、患者プライバシー保護と学生の学習意欲の両方を重視した、望ましい電子カルテのアクセス管理方法を明らかにすることである。【方法】信州大学医学部では、医学教育を担う臨床現場の現状や要望を踏まえ、診療科医師の負担増を伴わない「臨床実習・学生教育を支援する病院情報システムの運用・機能のあるべき姿の確立」を目指し検討を重ねてきた。その結果、平成26年4月から、病院医療情報部と医学部医学教育センターとが共同で臨床実習における電子カルテのアクセス管理を以下の方法にて実施する運びとなった。1) クリニカルクラークシップのガイダンスで全員から「病院情報システム利用と個人情報保護に関する誓約書」への署名を得る。2) 本学で以前から全利用者へ開放していた電子カルテの「アクセスログ参照機能」を利用し、各診療科の臨床実習が終了した時点で実習中に参照した電子カルテのログを自ら確認する。3) ログの内容を所定の「電子カルテ閲覧患者に関する自己申告報告書」に必要事項を記載し学務係に提出する。3) 担当患者以外の患者カルテを参照した場合には自己申告報告書の所定欄にその理由を必ず記載する。4) 医学教育センターのスタッフが提出された自己申告報告書の内容を適宜確認する。【結果】本学会では、平成26年4月から実施した医学科学生教育の電子カルテアクセス管理の実施状況を報告する。【結論】「アクセスログ参照機能」を利用した自主的アクセス管理は、患者プライバシー保護と学生の学習意欲の両方を重視した、学生教育における病院情報システムの新しい運用方法である。